

ウラディーミル&ヴォフカ ピアノ・デュオ さくらホール特別インタビュー

2016年4月29日 ハケ岳高原サロンコンサートの様子



日本ツアーで来日中のヴォフカ・アシュケナーズ氏、ウラディーミル・アシュケナーズ氏にさくらホール公演についてお話を伺いました。(2016年4月28日ハケ岳高原ロッジにて)

—— 親子でピアノ・デュオを始めるきっかけは。

「親子でしたのでいっしょに演奏する機会が多くありましたが、正式には1982年に『バルトークの2台のピアノと打楽器のための組曲』を父と弾いたのをきっかけに、徐々に活動が広がっていき、2005年にはハンブルクのスタインウェイの工場にて周年記念で演奏し、2011年、2014年の日本ツアーとともに、他の国々での演奏やレコーディングという形でさらに活動広がっていきました。」(ヴォフカ・アシュケナーズ)

—— ピアノ・デュオのすばらしいところは。

「ピアノ1台よりも2台のピアノの方が、可能性が広がり、音、音色が増え、音域も広がります。1台では出来ない曲、2台だからこそ出来る曲、またはシンフォニックな響き、それが2台のピアノ演奏のすばらしいところだと思います。」(ヴォフカ・アシュケナーズ)

「偉大な作曲家達が2台のピアノの曲の編曲(2台のピアノが原曲の場合も)を自身でしています。それはとても価値のあるもので、演奏されるべき作品です。私達はその作品を演奏し、広めていきたいです。」(ウラディーミル・アシュケナーズ)

—— 今回のツアーのプログラムであり、アンドレ・プレヴィンとのピアノ・デュオで名盤を残しているラフマニノフの「交響的舞曲」について。

「ラフマニノフの交響的舞曲は、完成された2台のピアノの曲なので是非聴いてほしいです。自分たちも喜んで演奏したい曲です。おそらく初演は1942年、公ではなくホームパーティのようなところで、ラフマニノフと友人のホロヴィッツが演奏したと思います。自分は昔アンドレ・プレヴィンとよく演奏しましたが、意外な組み合わせのピアニスト同士で演奏することも楽しいです。」(ウラディーミル・アシュケナーズ)

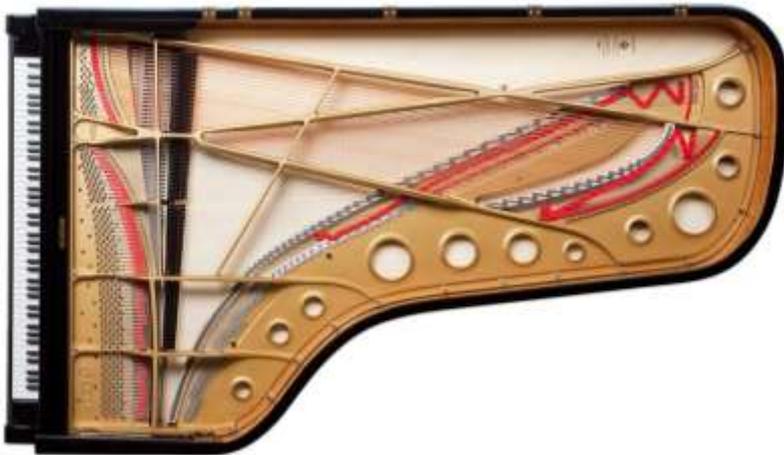
—— ツアーへの意気込みとコンサートの聴きどころは。

「偉大な作曲家達が2台のピアノのために完成した曲を演奏し、広めていくことが使命だと思っていますし、私達も楽しんで演奏しています。これらの曲がもっと演奏されたり、聴かれたりしていても良いのではと思っています。また、音楽は言葉で表現出来るものではなく、それは私達の演奏するすべてを聴いて感じてほしいです。」(ウラディーミル・アシュケナーズ)

—— 北上公演は日本の公共ホールで初めて2台のファツィオリピアノが並びます、ファツィオリの好きな点を教えてください。
「私はファツィオリの工場のあるイタリアのサチーレに行ったことがあります。工場には製造中のも含め、たくさんのピアノが並んでおり、感動的な光景でした。音楽ホールもあり、世界的なピアニストを招いて演奏会も行っています。私は創始者のパオロ・ファツィオリが大好きです。人間としても好きですし、彼は非常に純粋な心を持ってピアノにすべてをささげています。だからこそ自然に良いピアノを作っています。特に名前を挙げませんが、有名なピアニスト達がファツィオリを好んで使用しています。私達も今回2台のファツィオリで演奏出来ることを幸せに思います。(ウラディーミル・アシュケナージ)

—— 1台はさくらホールが所有するアルド・チッコリーニが日本ツアーで使用していたピアノ、もう一台は2010年にシヨパン国際コンクールで使用されたピアノを東京から運んできます。
「アルド・チッコリーニは素晴らしいピアニストです。もう一台もとても良いピアノが来るのですね。パオロ・ファツィオリの情熱が込められたピアノは間違いないでしょう。」(ウラディーミル・アシュケナージ)

ファツィオリ F-278



—— 未来のピアニストの方々へ、ピアノが上手になるための心構えがありましたら教えてください。
「何より大切なことは『音楽を愛すること』。ピアノが上手になりたいからピアノを練習するのではなく、最初に音楽が好きで、自分が何かを表現したいからピアノを弾いている。テクニックなどはその次です。そういう順番でピアノが上達していくものだと思います。そのことを見失わないようにしなければならないと思います。」(ヴォフカ・アシュケナージ)

「その通り！」(ウラディーミル・アシュケナージ)

—— メッセージをお願いします。

「北上の皆さまにごあいさつ申し上げます。皆さんにお会い出来るのを今から楽しみにしています！私達の音楽を聴いていただけることも楽しみにしています。」(ヴォフカ・アシュケナージ)

「私からも北上の皆さまへごあいさつ申し上げます。日本の皆さんが音楽を愛していることをよく存じておりますし、音楽に対して敬意を払っていることもよく知っています。皆さんのために演奏出来ることは演奏家としての特権であり、誇りだと思います。音楽を愛する皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。」(ウラディーミル・アシュケナージ)

※アシュケナージ両氏への同時インタビュー(聞き手:企画事業課 高橋建一郎)